

西郷隆盛さんの隠れた一面を伝える素晴らしい逸話の数々、短編集より

セゾんといっか 西郷さんの逸話

「しつかり性根を入れ替えい」

奄美大島での出来事。砂糖の収納買上げ役で鹿児島から来ていた中村某というのがいました。虎の威を借る狐（権力や権勢のある人をかさに着て、いばる人のたとえ）で上座に座り、その歓迎の席に出た西郷さんに対しても「何、遠島人が」という顔つきで会釈もしないのです。やがて酒の酔いがまわると、ヤマイモ（くだをまく乱暴）が始まり、百姓たちは恐ろしく縮みあがってしまいました。目に余る乱暴をじつと見ていた西郷さんはすくっと立ち上がり、

「こらっ、中村。島に來れば殿様んごつ思つちよつとか。ワイは丸田殿の手水鉢の水替えしとった昔の事を忘れたか。自分が貧乏をして育つたなら、他人の難儀もちつとは察しが出来るはずじゃのに、しつかり性根を入れ替えい」

大きな目でにらみつけ、大きなげんこつで頭をドカンと打たれたのです。それからというもの、中村の乱暴な振る舞いも無くなり、百姓たちもホッと一息つくことが出来たそうです。

「今度こそは、魂を入れ替えてみせもんで」

二度目の遠島、徳之島での出来事です。ある老婆が西郷さんを見て、
「だんなは、一年もせぬうちに二度も遠島になりなされて、よほどの横道者ござんすな。大ていのものなら一度遠島になると性が懲りるのになあ。今度は早くお許しが出るようになさいよ。毎日遊んだり相撲ばかりしてないで」とたしなめると、西郷さんはまじめに答えました。

「あいがとうござす。今度こそは、魂を入れ替えてみせもんで。安心おしやつたもんせ」

それから数日の後、その老婆が、たまたま島で一番偉い代官の中原が西郷さんの姿を見てすぐに馬からとび降り、誠に丁寧な挨拶をしているのを見て、その老婆はとても驚き、そんな偉い人に意見をしたことを深く恐れ入っておおびに來たそうです。西郷さんは声をあげて笑って老婆をなぐさめ、重ねてお礼をのべたそうです。

「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という諺がありますが、地位や位が上がればあがるほど謙虚になっていく西郷さんだったのです。（おわり）

「母の足」

その会社の社長は、次のようなことに気づきました。ノウハウや制度ばかりを追及しても、社員の心が豊かにならないと、組織は活性化しない。「本当の感謝とは何か？」を社員に実体験させてこそ、お客様に心から感謝できる社員が育つのだと。

このことに気づいた社長は、毎年の入社試験の最後に、学生に次の二つの質問をすることにしました。

「あなたは、お母さんの肩叩きをしたことがありますか？」この問いに、ほとんどの学生は「はい」と答えるそうです。

次の質問に、学生たちは驚きます。
「あなたは、お母さんの足を洗ってあげたことはありますか？」これには、ほとんどの学生が「いいえ」と答えるそうです。

「では、三日間差し上げますので、その間に、お母さんの足を洗って報告に來てください。それで入社試験は終わりです」

学生たちは「そんなことで入社できるのなら」と、ほくそ笑みながら会社をあとにします。

ところが、家に帰って実際にやろうとすると、母親に言い出すことが、なかなかできないのです。

ある学生は、二日間、母親の後をついてまわり、母親から「お前、おかしくなったのか？」と聞かれました。

「いや、あのー、お母さんの足を洗いたいたんだけど…」

「なんだい？ 気持ち悪いねえ」
こうしてその学生は、ようやく母親を縁側に連れて行き、たらいに水をくみ入れました。そして、お母さんの足を洗おうとして、足を持ち上げた瞬間…

母親の足の裏が、あまりにも荒れ放題に荒れて、ひび割れているのを手のひらで感じて、絶句してしまいました。

その学生は心の中で、「うちはお父さんが早いうちに死んでしまつて、お母さんが死に物狂いで働いて、自分と兄貴を養つてくれた。この荒れた足は、自分たちのために働き続けてくれた足だ」と悟り、胸がいっぱいになってしまいました。そして、

「お母さん、長生きしてくれよな」と、ひとこと言うのが精いっぱいだったのです。それまで、息子の「柄にもない親孝行」をひやかしていた母親は、「あいがとう」と言つたまま黙り込んでしまいました。

しばらくすると、息子の手に落ちてくるものがありました。
それは、母の涙でした。

学生は、母親の顔を見上げることができなくなつて、「お母さん、あいがとう」と言つて、自分の部屋に引きこもりました。

そして翌日、彼は会社へ報告に來ました。「社長、私はこんなに素晴らしい教育を受けたのは初めてです。あいがとうございました。」

「君は一人で大人になつたんじゃない。お父さんやお母さんや、いろいろな人に支えられて大人になつたんだ。そして、これからも、自分ひとりの力で一人前になるのではないんだ。」

私自身も、お客様やスタッフや、いろいろな人たちとの出会いの中で、一人前の社会人にならせていただいたんだよ」（終）
『涙の数だけ大きくなれる』より
木下晴弘著 フォレスト出版

著者の木下さんは、元カリスマ塾講師。生徒に伝えてきた「人生で大切なこと」の一つとして、ここでのポイントは『感謝』の気持ちに気づくこと。喜んでくれる親を見て、「人に喜んでもらうこと」が何と素晴

らしいことかという体験をする。その親孝行から『感謝』の大切さをあらためて気づくという、とても感動的なメッセージです。「感謝」テーマでつないでいきます。

「運がいい」

パナソニックを一代で築いた経営者の松下幸之助さんは、面接の最後に「あなたは運がいいですか？」と質問したそうです。

松下さん自身、「自分は運が強い」と常に考えていたといいます。船から転落して命を落とすところを危うく救助されたことがあったそうで、普通の人なら「自分は運が悪い」と思うはずのところを「自分はなんて運が強いのだろう」と自分の運の強さに自信を持つたそうです。

この質問ですが、それにどう答えるかで採用を判断していたといいます。運が悪いと答えた人は、たとえ高学歴でスキルがある人であっても不採用にしたそうです。

世の中に起こるさまざまな出来事、事象にはプラスもマイナスもありません。ただの事実が起こるだけ。それを人によってはプラスの意味を与え、人によってはマイナスの意味を与えてその出来事をとらえます。自分は「運がいい」と思える人は、利己主義ではなく、「利他主義」の傾向があります。「人に恵まれてきた」という感謝の自覚があるので、「自分は社会に恩返しをしなければならぬ」という使命感につながります。自分は「運が悪い」と考える人は、周囲への不平・不満、自分への卑下の気持ちがあり、「運が悪くて成功していない」という「恨み」につながります。

あなたは運がいいと思いますか？

「離別した母から」

誕生日祝う言葉

先頃、誕生日の前日に思いがけない電話がありました。「誕生日おめでとう」と母が伝えてほしいと言っています。去年もその

前の年も頼まれたのだけれど、電話できなくてごめんなさい。今年こそはと思い、かけました」

電話をくれたのは、20年以上前に一度だけ会つたことがある異父妹でした。

母は私が生まれてすぐに父と離婚し、私は父に引き取られ、その後、母は再婚しました。母とは私が大人になって2度会つたことがありますが、この年になって誕生日を祝ってもらえて夢のようでした。これまでも母が一人で祝つてくれていたのかと思うと胸が熱くなりました。

母は脳梗塞を患つてリハビリに励んでいるそうです。この春、勇気を出して会いに行こうと決めました。私を産んでくれたことに感謝の気持ちを伝えたいと思います。

2月19日付 本紙投書欄「気流」より



先月2月号記事で「妊産婦死亡率」の表記に誤りがありました。お詫び申し上げますとともに、下記の通り訂正させていただきます。【正】「アフリカ0.5%、日本0.004%」